

「～て」で始まる三節複文の考察

趙 順 文*

摘 要

本文主要根據仁田義雄（1993）以及南不二男（1993）對於句裡子句間前後銜接的理論，參考結合價語法，透過實例加以觀察與分析。語料以『国語基本用例辞典』的3萬例句為基準，抽出用法最廣泛用例最多的「～て」開頭的三節複句做為觀察分析的對象。

觀察與分析的結果，可得到下列結論：（一）此類複句的型式主要有10種即①「～て、～ ϕ 」、②「～て、～て」、③「～て、～から」、「～て、て以来」、「～て、～後」、④「～て、～ながら」、⑤「～て、～から」、「～て、～のだから」、「～て、ので」、「～て、のか」、「～て、～せいか」、⑥「～て、～が」、⑦「～て、けれども」、「～て、～のに」、⑧「～て、～と」、「～て、～たら」、「～て、～ば」、「～て、～なら」、「～て、～ても」、⑨「～て、～ように」、⑩「～て、～なんて」、「～て、～うちに」、⑪其他等等；（二）「～て、～けれども」「～て、～なら」「～て、～ため」等複句與預期的相反，其實例僅一、二例而已；（三）「～て、～なんて」與「～て、～らしく」應視為此類複句的一種；（四）南不二男（1993）所主張的「て」四種用法中，除了「て₄」以外，其他三種用法之間的界相當模糊，可從「～て、～ながら」的實例中獲得證明。

關鍵詞 「～て」開頭的三節複句・結合價語法・[S→(P)M] ((P)(N_n)P)

* 作者為本校東語系副教授

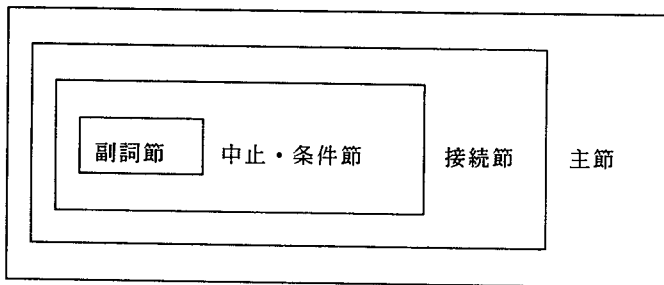
1. 序

小稿では結合価文法に基づいて、談話指向の日本語の文を一つまた一つ以上の節及び、これらを貫いて関係する題示語からなっているものだと見なし、節が一つの文は単文、節が二つまたは二つ以上の文は複文とし、特に用例が一番多く、用法が一番広い副詞節「～て」で始まる三節複文を中心に絞って、筆者が自ら採集した用例を通じて記述・分析することにより、日本語の記述的研究に寄与するところに目的がある。

2. 先行研究

複文の研究に関しては二節複文を対象とする論考は夥しい数にのぼるのに対し、三節複文を対象とする論考の数は微々たるものであり、しかもその内容が節間の階層性に集中している。代表的な論文としては仁田（1993）と南（1993）が取り上げられよう。

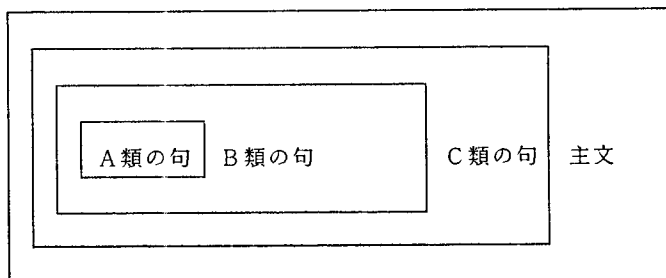
仁田（1993）は複文を主節と従節に分け、従節をさらに副詞節（～ながら、～つつ）・中止節（中止形、～て）・条件節（～と、～たら、～ば、～なら、～から、～ので）・接続節（～か、～けれども、～し）の四種類に細かく分け、節間の階層性を次のような図で示している。



一方、南（1993）は文を主文と従属句に分け、従属句をA類の句（～ながら〈平行継続〉、～つつ、～て₁、連用形反復）、B類の句（～て₂、～と、～ながら〈逆接〉、～ので、～のに、～ば、～たら、～なら、～て₃、～連用形、～ず（ずに）、～ないで）、C類の句

「～て」で始まる三節複文の考察

(～が、～から、～けれども、～し、～て、) 三つに小分けしている。仁田にならって、南の従属句同士の間階層性は次の図で示すと思う。



つまり、仁田の副詞節は南のA類の句、中止・条件節はB類の句、接続節はC類の句にほぼ相当するのである。もっとも南が「～ので」はB類の句、「～から」はC類の句に属するとしているのに対し、仁田は両者を一括して、接続節に入れると述べている。用語こそ違え、節間の階層性に限って、両氏の意味する所には大差はないと思う。

以下に、両氏の説を踏まえながら、『国語基本用例辞典』に出る3万の用例から三節複文の内、一番多い「～て」で始まる副詞節を抽出し、記述・分析してみよう。

3. 文の一般化

序で述べた内容に則れば、文の一般化に関して次のような定式が上げられよう。

S → Topic + [C]
→ Topic + [(M) (N_n) P]
→ Topic + ((P) M) ((P) N_n) P。

但し、S (sentence) は文、Topic は題示語、C (clause) は節、[] は集合、N (noun) は名詞、n は助詞、N_n は名詞に助詞を後続させた「上位名詞」(注1)、M は副詞類(注2)、P は名詞・状詞(形容動詞)に詞尾「である」を後続させたもの及び形容詞・動詞

などの述語になれる品詞類、P'はPに助動詞さらに助詞を後続させたもの、PNは節に名詞を後続させたもの、PMは節に副詞類を後続させたものをそれぞれ示す。

従って、小稿では文を主節と従節に分け、従節を名詞節と副詞節に小分けし、さらに副詞節を意味的に場所・時間・様態・条件・原因理由・後続などに細分する。小論における三節複文はもっぱら名詞節を除外して、二つの副詞節に主節が後続させたものをさす。換言すれば、仁田のいわゆる副詞節・中止節・条件節・接続節などは一括して筆者の副詞節「PM」に包まれると考えてよかろう。

4. 「～て」で始まる三節複文の多様性

「～て」が一番多いのはその用法が広いためである。南は「～て」を四種類に細分し、「～て₁」は主節の副次的な動き、「～て₂」は継起的または並列的な動き、「～て₃」は原因理由としての動き、「～て₄」は題示語の「…は」あるいは陳述副詞などを含む動きを表すとしている。「～て₁」は意味的に「～ながら」に相当するものと考えられるものの、用法上常に互換性があるとは限らないことは後述の考察で詳説する。

4.1 「～て、～φ」

「～て」に続く副詞節「～φ」はもっぱら村木（1991）の形式動詞あるいは伝統文法の中止形に当たるものと考えてよい。次の用例を参照されたい。

(1) 母の悲しそうな顔を見て、上京を前に、ぼくは複雑な気持ちになりました。

(国・700)

(2) 父はガードマンで、ちなみに身長は一メートル八十、体重は九十キロです。

(国・484)

注1：これは小泉（1993）の用語に従う。

注2：実際、奥津ほか（1986）は従来の接続助詞、一部の副助詞などを一括して形式副詞と名付けた。

「～て」で始まる三節複文の考察

用例(1)の「上京を前に」は文構造の定式にあてはまれば、「PM」(節に副詞を後続させたもの)に相当するものと認めてよかろう。しかし述語ないし接続助詞といった副詞類がないことから、村木はこれを形式動詞と名付けた。(2)の「ちなみに身長は一メートル八十」は同じように「PM」に相当し、かつ助動詞「である」と副詞類と両方とも欠如した「 ϕ 」節に属する。

- (3) 権太は頑丈な体つきで、気性も荒く、小さな豪傑を気取っている。(国・166)
- (4) 隣のおばさんはうわさ好きで、口が軽く、何でもすぐ人にしゃべる。(国・172)
- (5) 道は曲がって、見通しが悪く、草も伸びほうだいだった。(国・782)

用例(3)では「頑丈な体つきで」「気性も荒く」、(4)では「うわさ好きで」「口が軽く」、(5)では「曲がって」「見通しが悪く」というようにいずれも「～て、～ ϕ 」のパターンに属する。注意すべきはこれらの「～ ϕ 」はみな形容詞の中止形に相当するという点である。なお採集した用例には形容詞述語例えば「広くて」で始まる「～て」はないことを断っておく。これらの用例は上述した定式で示せば、次の通りである。

S → Topic + [(M) (N_n) P]

→ Topic + ((P) M₁) ((P) M₂) P。 但し M₁は「～て」、M₂は「～ ϕ 」

- (6) 祝宴は夜に入って、いよいよ乱れ、飲めや歌えの大騒ぎとなった。(国・778)
- (7) 初めての空の旅はお天气に恵まれて、富士山もよく見え、快適だった。(国・133)
- (8) この銃は内部にら旋状の溝をつけて、弾丸に回転を与え、弾道のゆがみを防いでいる。(国・777)

用例(6)では「祝宴は夜に入って」「いよいよ乱れ」、(7)では「初めの空の旅は

お天気に恵まれて」「富士山もよく見え」、(8)では「この銃は、内部にら旋状の溝をつけて」「弾丸に回転を与え」というように「～て、～φ」の二つの節はいずれも動詞述語を含み、しかも文頭に題示語が立つことが分かる。これらの用例を定式で示せば、次のようである。

S→Topic+ [(M) (N_n) P]

→Topic+ ((P) M₁) ((P) M₂) P。 但し M₁は「～て」、M₂は「～φ」

(9) 貴族社会が衰えて、時代は中世を迎え、武士時代へと移っていった。(国・85)

(10) 先生の号令がかかって、生徒たちは足なみをそろえ、行進を始めた。(国・140)

(9)と(10)の用例はいずれも「～て、～φ、」の節構造を持っているものの、題示語が文中に立つ点で前述した用例(6)(7)(8)と異なる。特に注意すべきは(9)では「貴族社会が衰えて」「時代では」、(10)では「先生の号令がかかって」「生徒たちは」というようにいずれも副詞節「～て」と文中の題示語は語用的な関係しか持っていないということである。これらの用例を定式で示せば、次のようである。

S→Topic+ [(M) (N_n) P]

→((P) M₁) +Topic+ ((P) M₂) P。 但し M₁は「～て」、M₂は「～φ」

(11) 試合が始まって、すぐに田中君のシュートが決まり、ぼくたちのチームは優位に立った。

(12) 先生の話は聞いて、決心が付き、ぼくもやっと腹が据わりました。(国・389)

用例(11)と(12)は両者とも「～て、～φ」の節構造を持っており、しかも題示語が主節内に立つ点で前述した用例と違う。注意すべきは題示語は場合によって助詞「も」が

「～て」で始まる三節複文の考察

用いられる点である。これらの用例を定式で示せば、次のようである。

S→Topic+ [(M) (N_n) P]

→ ((P) M₁) ((P) M₂) +Topic+P。 但し M₁は「～で」、M₂は「～φ」

(13) 神の前で、良心に照らして、包み隠さず申し上げます。(国・540)

(14) 彼はこの事件について言を左右にして、はっきりしたことは言わず、責任を逃れようとした。(国・59)

(15) 長者といわれた男が落ちぶれて、だれにもみとられず、惨めな死を遂げたそうだ。(国・774)

今まで述べた用例はいずれも「～て」に肯定の「～φ」を後続させた三節複文であるのに対し、用例(13)では「包み隠さず」、(14)では「はっきりしたことは言わず」、(15)では「だれにもみとられず」というようにいずれも否定の「～φ」を取る三節複文であることに注意されたい。用例(13)と(14)は定式化すれば、次のようである。

S→Topic+ [(M) (N_n) P]

→Topic+ ((P) M₁) ((P) M₂) P。 但し M₁は「～て」、M₂は「～φ」

なお、用例(13)の題示語は省略されると考えてよい。

4.2 「～て、～て」

「～て」で始まる三節複文の内、98例に達する「～て、～て」が一番多い。まず次の用例を参照されたい。

(16) 彼の話はいつも単刀直入で、歯ぎれがよくて、気持ちが良い。(国・474)

(17) 髪もひげもぼうぼうで、おまけに服装も変てこりんで、初対面の人はみな彼の

事を不気味に思う。(国・696)

(18) 彼と別れがつらくて、わたしは声をあげて、泣いた。(国・587)

用例(16)では「いつも単刀直入で」「歯切れがよくて」、(17)では「髪もひげもぼうぼうで」「おまけに服装も変てこりんで」(18)では「彼との別れがつらくて」「声をあげて」というようにいずれも名詞あるいは形容詞述語の「～て」にさらにもう一つの「～て」を後続させた三節複文であることが分かる。注意すべきはこれらの用例には題示語が存在するという点である。なお、これらの用例は定式化すれば、次の通りである。

S→Topic+ [(M) (M_n) P]

→Topic+ (PM₁) (PM₂) P。

→ ((P) M₁) +Topic+ ((P) M₂) P。

→ ((P) M₁) ((P) M₂) +Topic+P。 但し M₁ と M₂ は「～て」

(19) 係員は被害者の感情に気がつかって、適切な表現を用いて、説明を続けました。

(国・685)

(20) 掘った穴はきちんと埋めて、よく踏んで、地面を固めておきなさい。(国・159)

(21) その服はたっぷりして、着ていて、楽そうですね。(国・458)

(22) つきあいにかこつけて、父は毎晩お酒を飲んで、遅く帰ってきます。(国・150)

(23) 警告の姿を見て、どろぼうは泡を食って、逃げていった。(国・38)

用例(19)では文頭の題示語「係員は」は三節内の動作主主語、(20)では文頭の題示語「掘った穴は」は三節内の客体目的語、(21)では文頭の「その服は」は第一節内の状態主主語、(22)では文中の題示語「父は」は三節内の動作主主語、(23)では文中の題示語「どろぼうは」は三節内の動作主主語をそれぞれ兼ねている。南に従えば、(19)では「～て₁、～て₂」、(20)では「～て₂、て₂」、(21)では「～て₁、～て₂」、(22)で

「～て」で始まる三節複文の考察

は「～て₂、て₂」、(23)「～て₂、て₂」というようにこれらの用例はいずれも＜副次的な動き＞あるいは＜継起的または並列的な動き＞を表すものと考えられよう。

- (24) 「芸術は長く、人生は短い」と言って、優れた芸術は時代をこえて、生き続ける。(国・361)
- (25) 「ところで、加代のことだけど……」と言って、母はそこで言葉を切って、息をついだ。(国・46)
- (26) 弟は明日の試合の応援に使うといって、紙をちぎって、紙吹雪を作っている。(国・481)

これらの用例は前述した(19)～(23)のパターンとほぼ同じだが、発話動詞「～と言って」で始まる点が異なる。もっとも(24)では「『芸術は長く、人生は短い』」、(25)では「『ところで、加代のことだけど……』」、(26)では「明日の試合の応援に使う」というように直接・間接引用にせよ、いずれも動詞「言う」の必須成分と考えてよかろう。

今までの三節複文「～て、て」の用例には万遍なく題示語が付いているが、次の題示語なしの用例を参照されたい。

- (27) 両親が沖縄から神戸へ出てきて、琉球料理の店を営んで、もう三十年になる。(国・777)
- (28) きれいなチョウが沢を下って行って、田んぼの境目を北の方へ曲がって、姿を消した。(国・745)
- (29) 山奥に源を発した谷川や小さな川が集まって、大きな河となって、海に注ぐ。(国・173)

用例(27)では「両親が」は第二節内の動作主主語、(28)では「きれいなチョウが」は第二・三節内の動作主主語、(29)では「山奥に源を発した谷川や小さな川が」は第二・

第三節内の主語を兼ねている。つまり、これらの用例は無題示語文とはいえ、意味的に題示語文とほぼ同じ文法機能を持つのである。最大なる理由はこれらの「～て、～て」は「～て₂、～て₂」の〈継起的または並列的な動き〉を表すところにある。これらの用例は定式化すれば、次のようである。

S → Topic + [(M) (N_n) P]
 → ((P) M₁) ((P) M₂) P。 但し M₁、M₂は「～て」

(30) 田中君はあれこれと口実を作って、当分の仕事をしないで、帰ってしまった。

(国・507)

(31) めんどうくさいと言って、弟は歯を磨かないで、寝ってしまった。(国・219)

(32) 兄は朝寝坊をして、布団も畳まずに、急いで飛び出していった。(国・453)

(33) 授業中におなか痛くなって、とうとうがまんし切れずに、医務室へ行った。

(国・550)

用例(30)と(31)では「～て、～ないで」、(32)と(33)では「～て、～ずに」というようにいずれも「～て」節に否定の「～て」節ないし書き言葉的「～に」節を後続させたものである。用例(33)を除いて、(30)(31)(32)に出る「～て、～ないで」と「～て、～ずに」は南の「～て₂、～て₁」に相当すると考えてよかろう。つまり、第一節内の「～て」は〈継起的または並列的な動き〉をそれぞれ表す。もっとも(33)の「～て、～ずに」では「～て」と「～ずに」は両方とも〈原因理由としての動き〉と取れる。なお(32)では「急いで」は節と認めらず、臨時的な副詞として用いられている。これらの用例は定式化すれば、次の通りである。

S → Topic + [(M) (N_n) P]
 → Topic + ((P) M₁) ((P) M₂) P。 但し M₁は「～て」、M₂は否定の

「～て」で始まる三節複文の考察

「～ないで」または「～ずに」

一方、「～て、～ないで」または「～て、～ずに」とまるで正反対の三節複文「～ないで、～て」「～なくて、～て」が存在することは次の用例で分かる。もっともこれに似た三節複文「～ずに、～て」は存在すべきなのに、今度の採集した用例にはこのパターンは見当たらない。

(34) そう簡単に言わないで、ぼくの立場になって、考えてくれよ。(国・455)

(35) いつまでも遊んでばかりいないで、これからは性根を据えて、働きなさい。

(国・370)

(36) 自己主張ばかりしないで、相手の立場にも立って、考えましょう。(国・456)

(37) 複雑な計算問題が解けなくて、かんしゃくを起こして、ノートをほうり投げた。

(国・111)

用例(34)では「そう簡単に言わないで」「ぼくの立場になって」、(35)では「いつまでも遊んでばかりいないで」「これからは性根を据えて」、(36)では「自己主張ばかりしないで」「相手の立場にも立って」というようにいずれも<継起的または並列的な動き>を表すのに対し、用例(37)では「複雑な計算問題が解けなくて」「かんしゃくを起こして」は<原因理由としての動き>を表すと考えてよかろう。もっとも「～なくて」は原因・理由を表すのが普通である。

4.3 「～て、～から」「～て、～て以来」「～て、～後」

前述した「～て、～て」内の「～て」は文によって意味が違うのに対し、「～て、～から」「～て、以来」「～て、～後」の「～て」と、「～てから」または「～て以来」または「～て後」はもっぱら<継起的または並列的な動き>を表すことは次の用例で頷げる。

- (38) 刑事は警察手帳を見せて、身分を明らかにしてから、捜査を始めた。(国・785)
- (39) お茶でも飲んで、気持ちを落ち着けてから、ゆっくり話を聞きましょう。(国・232)
- (40) 切符売り場を離れて、しばらくたってから、買ったばかりの切符がないことに気がついた。(国・457)
- (41) 彼女がいなくなって、半年が過ぎてから、さびしさがひとしおつってきました。(国・697)
- (42) 老人は大きく背伸びをして、首を左右に振った後、再び仕事に戻りました。(国706)
- (43) 文明が発生して以来、人間はさまざまな技術を開発し、自分たちの生活を豊かにしてきた。(国・110)

用例(38)～(41)では「～て、～から」、(42)では「～て、て以来」、(43)では「～て、～後」の三節複文をそれぞれ持っている。もっとも「～て、～て以来」は書き言葉的表現と認められよう。今度採集した用例の内、このパターンに当たるのはこの一例しかない。

4.4 「～て、～てながら」

前述したように仁田は「～ながら」は副詞節、「～て」は中止節と認めた上で、副詞節はいつも中止節に包み込まれるとしている。「～て」に関しては「～て₂」の<継起的または並列的な動き>、「～て₃」の<原因理由としての動き>、「～て₄」の<提題の「は」と陳述副詞などを含む動き>などの意味を表す場合、この説には異論を挟む余地はないが、「～て₁」が<副次的な動き>の場合は「～て」が「～ながら」に包み込まれるのは次の用例でうかがえる。引用は長たらしいが、次の用例を参照されたい。

- (44) 日本人は季節の移り変わりを鋭敏に感じ取って、そのときどきを味わいながら、

「～て」で始まる三節複文の考察

生活してきた。(国・85)

(45) 孫悟空と沙悟浄・猪八戒の三人は三蔵法師のお供をして、魔物や妖怪と闘いながら、旅を続けた。(国・763)

(46) わたしはカンテラの灯をかざして、中の様子を探りながら、暗いほら穴を進んでいった。(国・150)

(47) 先生は教科書を声に出して、読ませながら、部分部分で細かい説明をしてくれた。(国・710)

(48) 働き者の若者は一日中畑に出て、土と汗とにまみれながら、働き続けた。(国・16)

(49) 先生は時々冗談を言って、生徒を笑わせながら、愉快に授業を進めていきました。(国・379)

(50) 彼女は黙って、時々うちわを動かしながら、庭の虫の音を聴いている。(国・614)

(51) 両の手を顔に当てて、肩を小さく波打たせながら、少女は泣いていた。(国・594)

(52) 向こうから男の子がポケットに手を突っ込んで、格好をつけながら、やってくる。(国・161)

(53) 子供たちが土を丸めて、おだんごを作りながら、楽しそうに遊んでいる。(国・765)

有題示語文にせよ、無題示語文にせよ、これらの用例はいずれも三節内の動作主主語が一同である点で一致しているし、「～て、～ながら」の「～て」については「～て₁」の<副次的な動き>と「～て₂」の<継起的または並列的な動き>との間に一線を面すのは難しかろう。用例(44)では「季節の移り変わりを鋭敏に感じ取って」「そのときどきを味わいながら」、(45)では「三蔵法師のお供をして」「魔物や妖怪と闘いながら」、(46)では「教科書を声に出して」「読ませながら」、(48)では「一日中畑に出て」「土と汗とにまみれながら」、(49)では「時々冗談を言って」「笑わせながら」、(50)では

「黙って」「時々うちわを動かしながら」、(51)では「両の手を顔に当てて」「肩を小さく波打たせながら」、(52)では「ポケットに手を突っ込んで」「格好をつけながら」、(53)では「土を丸めて」「おだんごを作りながら」というよういずれも基本的に<副次的な動き>の意味を持っているものの、なおかつ<継起的または並列的な動き>の意味を失ってはいない。現にこれらの三節複文「～て、～ながら」を「～ながら、～て」に置き換えると、文はただちに不自然なものにならざるをえない。もっとも次の3例では一見して「～ながら」は「～て」に包み込まれるパターンに当たるようだが、実は予想と違って、「～ながら」はむしろ後続の主節に包み込まれると考えられよう。

(54) 電話がなかなか空かなくて、いらいらしながら、とうとう三十分も待たされた。

(国・9)

(55) リヤカーにわずかな家財道具をつめて、急な坂道をウンウン言いながら、登った。(国・252)

(56) 球が打者の近くに来て、曲がりながら、急に落ちる。(国・745)

用例(54)では「いらいらしながら」は「とうとう三十分も待たされた」、(55)では「急な坂道をウンウン言いながら」は「登った」、(56)では「曲がりながら」は「急に落ちる」にそれぞれ包み込まれるとっていい。

4.5 「て、から」「～て、のだから」「～て、～ので」「～て、のか」「～て、せいかな」

このパターンは「～て」に原因理由を表す「～から」「～でだから」「～ので」「～のか」「～せいかな」などを後続させたものだ。「のだから」(注3)「～せいかな」を除いて、「～のか」は従来の研究書では副詞節としてほとんど認められていないものの、多用され

注3：例えば益岡ほか(1992)はこれを「から」「ので」などの原因理由を表すグループに入れているとしている。

「～て」で始まる三節複文の考察

るのは今度の採集した用例でも分かる。まず「～て、～から」の用例を参照されたい。

- (57) 彼もそろそろ年で、疲れが見えているから、仕事を選べばいいのにねえ。(国・101)
- (58) 姉は正直で、愛想を言うのが下手だから、ずいぶん損をしている。(国・2)
- (59) 車が多くて、危ないから、駅の界わいへ子供一人で行ってはいけません。(国・135)
- (60) 仕事が忙しくて、行けそうにもないから、今度の計画からは下りるよ。(国・128)
- (61) アルバイトに熱中しすぎて、必要単位が取れなかったから、卒業が危ないよ。(国・26)
- (62) きょうは、ボーナスが入って、懐が暖かいから、何か買ってあげよう。(国・17)
- (63) 前髪がのびて、目の辺りがうっとうしそうだから、そろそろ切ったほうがいいわよ。(国・85)

用例(57)は名詞述語、(58)は状詞述語、(59)と(60)は形容詞述語、(61)と(62)と(63)は動詞述語「～て」で始まる副詞節にそれぞれ「～から」を後続させたものであることに注意してもらいたい。これらの用例に限っては「～て」は<原因理由としての動き>を意味するので、後続の「～から」に包ま込まれると、二重の原因理由を表すことになる。実際、これらの用例については第一節内の「～て」を「～から」に置換した上で、第二節内の「～から」を削除しても、文としての自然さをなお保っていると思う。つまり、(57)では「彼もそろそろ年で」は「彼もそろそろ年だから」、(58)では「姉は正直で」は「姉は正直だから」、(59)では「車が多くて」は「車が多いから」、(60)では「仕事が忙しくて」は「仕事が忙しいから」、(61)では「アルバイトに熱中しすぎて」は「アルバイトに熱中しすぎるから」、(62)では「ボーナスが入って」は「ボーナスが入

るから」、(63)では「前髪がのびて」は「前髪がのびるから」というようにいずれも自然文として直接に後続の主節に依存するのである。

一方、「～て、～から」の延長線にある「～て、～のだから」の用例は次のようである。

(64) 人は皆自分の考えや感情をもって、生活しているのだから、おたがいの感情を傷つけないようにしよう。(国・179)

(65) 自分から誘っておいて、けろっと忘れていたのだから、まったく世話はないよ。(国・407)

(66) 親に背いて、勝手に家を出たのだから、簡単には戻れない。(国・424)

(67) 正々堂々と戦って、それで負けたのだから、悔いはないさ。(国・550)

前述した「～て、～から」とやや違って、これらの用例の「～て」は後続の「～から」に包み込まれて、全体として一つの原因理由を表すと考えてよかろう。つまり、用例(64)では「自分の考えや感情をもって」は、(65)では「自分から誘っておいて」、(66)では「親に背いて」、(67)では「正々堂々と戦って」というようにいずれも後続の「～から」の一部と認めたほうがいい。

ところで、三節複文「～て、～から」ないし「～て、～のだから」には終助詞が多用されるのに対し、「～て、～ので」には終助詞が減多に使用されないのは次の用例で頷ける。

(68) その若者は無口で、本心を明かすこともないので、なかなか友達できなかった。(国・6)

(69) 暗くて、足元が危ないので、気をつけてください。(国・26)

(70) あの先生の授業は楽しくて、肩が張らないので、勉強ぎらいのぼくもひきこまれます。(国・155)

(71) 溝を飛びそこねて、片足をつっこんだので、泥だらけになってしまった。(国・777)

「～て」で始まる三節複文の考察

(72) 道がでこぼこしていて、平らでないので、バスがガタゴト揺られる。(国・438)

(73) 大声を出して、味方チームの応援をしたので、すっかり声がかれてしまった。

(国・172)

つまり、これらの用例は「～て、～から」「～て、～のだから」と違って、(70)を除いてほとんど書き言葉的表現と認めていい。もっとも、この「～て、～ので」は第一節内の「～て」を「～ので」に置き換えた上で、第二節「～ので」を削除して、後続の主節に直接に依存する点で、「～て、～から」とかなり似通っている。ちなみに三節複文の「～ので」は二節複文の「～ので」に比べると、モダリティー性が低いことを一言断っておく。

(74) 小屋が古くなって、ゆがんできたのか、戸がよくはまらない。(国・655)

この用例は従来の説では挿入文(注4)として扱われていたが、実際この種の「～のか」はむしろ「～ので」から派生したものと考えてよかろう。なせかという点、「～のか」は意味的に原因理由の不確かさを表すからだ。実際、この文は「小屋が古くなって、ゆがんので、戸がよくはまらない」という表現の延長線にあるのである。もっとも三節複文はともかくとして、二節複文「～のか」が多用されるのは今度の調査で分かった。

(75) 姉は冬になって、脂肪がついたせいかな、ちょっと太り気味だ。(国・709)

(76) 試合に勝って、興奮していたせいかな、少しも寒さを感じなかった。(国・376)

(77) 新学期が始まって、皆が張り切っているせいかな、クラスの雰囲気明るく感じられる。(国・7)

注4：もっとも「先生には、だれがうそをついていて、だれが正直に言っているのか、ちゃんとお見通しだ。」「はっきりと観点を決めて、何が言いたいのか、中心の部分が分かるように表現しよう。」のような「～て、～のか」では「～のか」は疑問詞の付いている挿入文と認めてよかろう。

これらの用例は「～て、～のか」と同様、いずれも原因理の不確かさを表すが、従来の説では「～せいか」はマイススの原因理由を表すとしているが、(76) (77) の二例から見ると、これは付会であると思う。

4.6 「～て、～が」「～て、～けれども」「～て、～のに」

三節複文「～て、～けれども」はわずか2例しかないのみ対して、「～て、～が」は58例に達することから、このパターンが如何に多用されているかが分かる。もっとも、三節複文である以上、書き言葉的表現の「～が」が好んで使われるのも無理はなかろう。次の用例を参照されたい。

- (78) 兄は常識的な人間で、悪いことなど絶対にしないが、その分おもしろみに欠けている。(国・348)
- (79) 人生は平らで、まっすぐな道ばかりではないが、苦しみの多い道もしっかり歩んでほしい。(国・438)
- (80) 祖母は食が細かくて、ほんの少ししか食べないが、特に体が弱いわけでもない。(国・735)
- (81) 父は五年前の夏に悪い病気になって、しばらく入院したが、治療のかいもなく半年後に他界した。(国・685)
- (82) 妹はペットの小鳥に逃げられて、ふさぎこんでいたが、一カ月たってようやく快活な少女にもどった。(国・131)

用例(78)では「常識的な人間で」は名詞述語、(79)では「平らな」は状詞述語、(80)では「食が細かくて」は形容詞述語、(81)では「五年前の夏に悪い病気になって」は動詞述語、(82)では「ペットの小鳥に逃げられて」は動詞述語というようにいずれも「～て」で始まる副詞節に「～が」を後続させたもので、しかも題示語一つがこれらの節を貫いて関係する。次の用例は同じパターンだが、題示語が省略されるものと言えよう。

「～て」で始まる三節複文の考察

(83) 街の雑踏の中に友達のを見いだして、追いかけたが、すぐ見失ってしまった。

(国・770)

(84) 弟にせがまれて、一緒に漫画、映画を見に行ったが、けっこう楽しかった。

(国・767)

(85) 一人っ子を中心にして、親子三人貧乏だが、幸せにくらしている。(国・489)

つまり、用例(83)と(84)では題示語の「私は」、(85)では構文上内蔵された題示語「親子三人は」はそれぞれ省略されると見ていい。

一方、前二節が同一の題示語と、主節がもう一つの題示語とが組み合わさった三節複文「～て、～が」が使用されるのは次は用例で分かる。

(86) 名を呼ばれたような気がして、ふりかえったが、後ろは木の葉が風に鳴るばかり。(国・759)

(87) 釣った魚をその場でさしみにして、食べさせてくれたが、ほおが落ちそうだった。(国・731)

用例(86)では前二節「気がして」「ふりかえったが」に共通な題示語は省略された「私」、主節「木の葉が風に鳴るばかり」の題示語は「後ろ」は認められる。(87)では三節とも題示語が省略されているものの、前二節の題示語は例えば他人である「彼は」、主節の題示語は「魚は」と解釈されよう。

用例(86)と(87)は両方も、題示語付きの肯定表現主節であるのは対し、次の用例はいずれも題示語付きの否定表現の主節である。

(88) カバンをまちがえたことに気づいて、すぐに引き返したし、すでに男の姿はそこになかった。(国・371)

(89) 弱虫の弟に暗示をかけて、自信をつけようといろいろしてみたが、効果はなかつ

た。(国・40)

(90) 新聞の広告に好奇心をそそられて、この本を買ってみたが、思ったほどおもしろくはなかった。(国・44)

(91) 身をかがめて、机の下を探してみたが、落とした百円玉は見あたらない。(国・140)

(92) いなくなった猫を四方八方手を尽くして、探したが、とうとう見付からなかった。(国・332)

(93) 伯父の有力なつてをたよって、就職を頼んだが、どうも脈はなさそうだ。(国・787)

用例(88)～(93)はいずれも「～て、～が」に否定表現の題示語付きの主節を後続させたものである。注意すべきはこのパターンは主節の題示語は往々にして前二節の客体目的語であるという点である。例えば(90)では省略された題示語「この本は」は「この本を買ったが」、(91)では「落とした百円玉は」は「机の下の(百円玉)を探してみたが」、(92)では省略された「猫は」は「いなくなった猫を四方八方手を尽くして探して」の客体目的語をそれぞれ表すと思う。(93)にしては主節の題示語「脈は」は語用的に「就職の脈」と見て、「就職を頼んだが」の客体目的語である「就職」と依然として関係を持っている。

こうした三節複文「～て、～が」の主節に否定表現が好んで用いられるのは「～が」自身の意味するところの「対比」と深い関係があるからに違いない。

「～て、～けれども」は「～て、～が」と違って、かなり話し言葉的表現であることは次の用例で分かる。

(94) 今日はパリッとした格好をして、おつにすましているけど、どうしたんだい。
(国・119)

(95) すれ違った人が私を見て、妙な顔をしたけれど、顔に何かついてるのかしら。

「～て」で始まる三節複文の考察

(国・787)

つまり、用例(94)では「どうしたんだい」、(95)では「顔に何かついているのから」というようにいずれも主節には話し手のモダリティーを表す「終助詞」が付いていることが分る。次の用例は「～て、～のに」のパターンに属する。

(96) 母は落とした指輪にまだ未練をもっていて、半年もたつのに、ときどき愚痴をこぼす。(国・789)

(97) みんながすじ道を立てて、説明したのに、私の強い A 君は誤りを認めなかった。(国・129)

(98) 運び出す荷物の量を見て、せっかくテレビを見かけたところなのに、母に用事を言いつけられた。(国・772)

(99) 宿題を済ませて、せっかくテレビを見かけたところなのに、母に用事を言いつけられた。(国・772)

(100) 母親はこの将来を心配して、胸を痛めているのに、彼の素行はちっとも直らない。(国・802)

(101) 見本を見て、注文したのに、実際に送ってきた実物は別のものだった。(国・785)

(102) 病弱だった母は乳があまり出なくて、ぼくを育てるのに苦労したそうです。(国・483)

用例(96)では「母は」、(97)では「私の強い A 君は」、(98)では「ぼくたちは」、(99)では省略された「私は」はそれぞれ三節複文「～て、～のに」の題示語に当たるのに対し、(100)では「母親は」「彼の素行は」、(101)では省略された「私は」と「実際に送ってきた実物は」は前二節と主節との題示語が違うのである。注意すべきは(101)に出る「～のに」は動詞「苦労した」の実現に欠かせない必須成分として、このパターン

の「～て、～のに」の「～のに」と異なる文法機能を果たしているというところである。誤解を避けるために、表記上この種の「～のに動詞」の「～のに」の後ろに読点を打たないほうがよかろう。

4.7 「～て、～と」「～て、たら」「～て、ば」「～て、なら」「～て、～ても」

条件の意味を表す三節複文の用例を調べたところ、「～て、と」は90例、「～て、たら」は22例、「～て、～ば」は21例、「～て、～なら」は1例、「～て、～ても」は20例とかなりばらつきが多い。まず用例が一番多い「～て、～と」を参照されたい。

- (103) 家の周りはすべて畑で、北風が吹きすと、土ぼこりがひどくてたまらない。
(国・733)
- (104) 年末は忙しくて、人手を増やさないと、とてもやっていけない。(国・712)
- (105) 質問は要点を明確にして、出してくれないと、答えにくい。(国・808)
- (106) 今日のお客はうるさい人ばかりで、仕事が終わると、わたしはくたくたに疲れていました。(国・502)
- (107) 内田さんがいつも華やかな存在で、彼女がいると、教室の中がパット明るくなる。(国・651)
- (108) バスを降りて、二、三分歩くと、おじさんの家に着く。(国・128)
- (109) 虫眼鏡を使って、紙の上に太陽の光を集めると、紙が焼ける。(国・22)
- (110) この川に沿って、さかのぼると、山あいの小さな湖に至る。(国・173)

用例(103)では「すべて畑で」は名詞述語、(104)では「忙しくて」は形容詞述語、(105)では「要点を明確にして」は動詞述語というようにいずれも「～て」で始まる副詞節に「～と」を後続させたものであり、しかも題示語一つがこれらの節を貫いて関係するのである。これと違って、用例(106)には「今日のお客は」「わたしは」と二つの題示語が存在することに注意されたい。もっとも(107)では題示語の「内田さんは」は後続

「～て」で始まる三節複文の考察

の「～と」節内の「彼女が」に当たるものの、構文上そう使わざるをえない。一方、(108) (109) (110) はいずれも無題示語の三節複文「～て、～と」と言えよう。実際深く考えると、これらの三例はいずれも前に節内に同一の動作主主語が存在する点で一致している。勿論、(108) (110) に限って三節間を貫いて関係する題示語が省略されるといった見方も間違っていない。

- (111) 抜き手を切って、プイに泳ぎつくと、少年は浜にいるわたしに手を振って見せた。(国・777)
- (112) みかんの皮をむいて、口の中に入れてやると、祖母はおいしそうに汁を吸った。(国・383)
- (113) 四コーナーを回って、直線にかかると、選手たちはぐんぐんスピードを上げた。(国・383)
- (114) 戦闘機がすさまじい響きをたてて、頭上をすぎると、女の泣きわめく声が聞こえた。(国・587)
- (115) 一瞬痛みを覚えて、ひじを見ると、そこに大きなハチが止まっていた。(国・123)
- (116) 金魚を飼育・観察して、生活の様子が分かると、愛情がわいてきた。(国・2)
- (117) パーティーが終って、お客さんが帰ると、急に家の中がさびしくなりました。(国・137)

前述の「～て、～と」がいずれも基本形の主節で終わるのに対し、このパターンは「た」形の主節で終わることに注意されたい。用例(111)では「少年は」、(112)では「祖母は」、(113)では「選手たちは」というようにいずれも題示語兼動作主主語は三節を貫いて関係する。(114)では「戦闘機が」、(115) (116)では両例とも前二節内の同一の動作主主語(注5)は省略されているし、(117)では「パーティーが」「お客さんが」「家の中が」はそれぞれ三節内の動作主主語に相当する。

- (118) そのうち慣れて、チェックポイントをつかむと、仕事がうんと早く楽になるよ。
(国・478)
- (119) 栄養をとって、ゆっくりやすんでいないと、いつまでも病気が治らないよ。
(国・576)
- (120) あまりえさを与え過ぎて、水槽の水を濁すと、金魚が病気になってしまうよ。
(国・604)
- (121) 姿勢を正して、本を読まないと、目を悪くしますよ。(国・452)
- (122) 孫たちが遊びに来て、帰ると、家の中はまるであらしが過ぎ去った直後のよう
だ。(国・33)
- (123) レモンの汁を絞って、はちみつを入れて飲むと、体にいいようだ。(国・357)
- (124) 岬のはなに立って、広い海を見ていると、何やら気持ちが広がるようだ。(国・
648)
- (125) 祖父の病気もようやく快方に向かって、この分だと、春には退院できそうだ。
(国・791)
- (126) 主体性をもって、勉強にも遊びにも取り組むと、はりのある生活が送れるでしょ
う。(国・343)

従来の説では「～と」に後続させた主節は話者のモダリティーを含まないとしているが、
上述した用例で明らかのように終助詞「よ」・助動詞「ようだ」「そうだ」「でしょう」
などモダリティーを持つことから、細かい所にはなお修正する余地がある。

(127) お風呂に入って、汗を流したら、サッパリとした。(国・16)

(128) 放課後の掃除をサボって、帰ったら、翌日先生からお目玉をちょうだいした。

注5：もっとも「生活の様子分かる」に即しては「生活は」は客体主語、もう一つの省略された
成分例えば「私に」は状態主（能力者）補語と考えられるが、ここでは広義的な解釈に従う。

「～て」で始まる三節複文の考察

(国・491)

(129) ミシンの構造を確かめたくて、ばらばらに分解したら、組み立てられなくなってしまった。(国・447)

(130) 一年間我慢に我慢をかさねて、儉約したら、ずいぶんお金がたまりました。

(131) ぱんぱんにふくらんだ風船を手で押しつけて、圧力を加えたら、パーンとわれてしまった。(国・23)

(132) こんな所に落書きして、先生に見つかったら、ただではすまされないよ。(国・450)

三節複文「～て、～たら」については用例(127)では「～て₂」、(128)では「～て₂」、(129)出は「～て₃」、(130)では「～て₁」、(131)では「～て₂」、(132)では「～て₂」というよにいずれも「～たら」さらに基本形あるいは過去形の主節を後続させたものと考えられる。もっとも(129)では「ミシンの構造を確かめたくて」は意図的結果である目的と見てもよかろう。

(133) たかが小学四年生の子供相手と思って、将棋をさしていたら、みごとに負かされてしまった。(国・3)

(134) 机に座って、マンガを読んでいたら、うしろに目をとがらした母が立っていた。(国・555)

(135) しっぽを引っ張ったりして、ねこを構っていたら、つめで引っかかれた。

(136) こっそりぬけ出して、遊びに行こうとしていたら、母と目が合ってしまった。(国・806)

(137) 自分一人ぐらいたいしたことはないと思って、みんながごみを捨てたとしたら、大変なことになるでしょう。(国・432)

前述した用例は動詞第6形に「たら」を後続させた「～たら」節であるに対し、用例

(133)は動詞「さしている」、(134)では動詞「読んでいる」、(135)で動詞「構っている」、(136)は動詞「行こうとする」、(137)は動詞「捨てたとする」というように多種多様な動詞の活用形に「たら」を後続させた「～たら」節であることに注意されたい。もっとも用例(133)～(137)では「～て」節の「て」はいずれも＜継起的または並列的な動き＞の「て₂」を表す。

なお、三節複文「～て、～たら」の主節がモダリティーを含むのも用例で分かる。

次に三節複文「～て、～ば」のパターンの用例を参照されたい。

(138) 彼は釣りが大好きで、暇さえあれば、自分の釣竿をいじっている。

(139) 弟も大きくなって、ジャンプすれば、天井に手が着くようになった。

(140) 書き損じたはがきは郵便局に持って行って、手数料を払えば、新しいものと替えてくれます。(国・428)

(141) 魔法使いがじゅ文を唱えて、魔法を解かなければ、王様は一生眠りについたままです。

(142) 国道に出て、二十キロも行けば、都会のおいのする店が見られます。

用例(138)～(142)については最後の(142)を除いて、いずれも典型的な題示語に三節を後続させた三節複文であるが、詳しく見れば、(138)と(139)では「彼は」「弟も」はそれぞれ題示語兼動作主主語(注6)、(140)では「王様」は主節だけの動作者主語に相当することが分かる。もっとも(142)においては題示語一つ例えば「私達は」は省略されると考えられよう。

一方、逆接条件法の三節複文「～て、～ても」に関しては次の用例を見られたい。

(143) あの子は馬の耳に念仏で、いくら注意しても、いたずらをやめない。(国・780)

注6：もっとも「彼が釣りが大好きで」では「彼が」は経験者補語または経験者主語と見る学者もいる。

「～て」で始まる三節複文の考察

- (144) 弟は負けん気が強くて、終盤になっても、なかなか敗北を認めようとしなかった。(国・632)
- (145) あの人にはいくら言葉を費やして、説明しても、分かってもらえない。(国・498)
- (146) 誠意をもって、忠告しても、彼女は自分の行動を改めようとはしなかった。(国・488)
- (147) 校則をたくさんつくって、義務で縛っても、問題解決にはならないだろう。(国・331)

用例(143)～(146)ではいずれも動詞第6形に「ても」を後続させたものであり、しかも題示語が付いた三節複文である。用例(143)と(144)では「あの子は」「弟は」は題示語兼動作主(状態主)主語、(145)では「あの人には」は題示語兼間接目的語、(146)では「彼女は」は題示語主語であることに注意されたい。もっとも(145)では「言葉を費やして」「説明しても」、(146)では「誠意をもって」「忠告しても」というように両節とも題示語と違う動作主主語は存在しているものの、表現されていない。(147)は題示語なしの三節複文と言えよう。

- (148) 彼はたくさんの土地を持っていて、黙っていても、月何百万もの収入があります。(国・467)
- (149) いろいろ言葉を換えて、本心を聞き出そうとしても、彼女はさりげなく話題を変える。(国・137)
- (150) 美しい自然が破壊されることを知って、土地の人文は体を張ってでも、反対する構えを見せた。(国・170)

用例(148)は「黙っている」、(149)は「聞き出そうとする」、それぞれ「ても」を後続させた三節複文「～て、～ても」であるが、(150)に至っては「張って」に直接「で

も」を後続させたものであることに注意されたい。

「～て、～なら」と「～て、～んじゃ」のパターンはそれぞれわずか一例しかない。

(151) 調子が高すぎて、歌えないのなら、一オクターブ下げてもいいですよ。(国・490)

(152) 部長が先頭に立って、部則を破ったんじゃ、決まりがつかない。

実際二節複文「～なら」「～んじゃ」は用例が沢山出ている点で三節複文「～て、～なら」「～て、～んじゃ」と異なる。

ところで「～て、～と」のパターンは条件法を表すほか、引用または内容を意味する場合もある。次の用例を参照されたい。

(153) 彼は鼻息をあらして、「金持ちなんてくだらない」と、ひとりで威張っていた。
(国・65)

(154) 初め乗った飛行機が乱気流に巻き込まれて、空中分解するのではないかと、恐ろしかった。(国・717)

(155) よくない友人の影響を受けて、弟は悪に染まるのではないかと、彼は心配した。
(国・424)

(156) ウィンドーには各社の見本が並んでいて、どれにしようかと、迷ってしまった。
(国・785)

用例(153)では「『金持ちなんてくだらないと』と」は「威張っていた」、(154)では「空中分解するのではないかと」は「恐ろしかった」、(155)では「弟は悪に染まるのではないかと」は「心配した」、(156)では「どれにしようかと」は「迷ってしまった」というようにいれども引用または内容を意味する「～と」節は後続の動詞の実現に欠かせない必須成分と見てもよかろう。もっとも、これらの用例における「～て」節の「て」はもっ

「～て」で始まる三節複文の考察

ぱら<継起的または並列的な動き>を表す。

なお、次の用例に出る「～と」節は前述した用例と同様、引用または内容を意味するが、後続の動詞の実現に必要ではない随意成分、換言すれば臨時的成分と認められよう。

(157) 猟師は死んだ母ぐまのそばをはなれない子ぐまを見て、かわいそうなことをしたと、太いため息をついた。(国・468)

(158) 彼はぐるりと仲間を見渡して、「悪口を言い触らしたやつはだれだ。」と、にらみつけた。(国・789)

(159) このたびは里に帰って、ゆっくり病気を治してこいと、殿様からありがたい計らいがあった。(国・35)

(160) 発車して間もなく、「乗車券を拝見させていただきます。」と、車掌が回ってきた。(国・631)

用例(159)では「かわいそうなことをしたと」は「太いため息をついた」、(158)では「『悪口を言い触らしたやつはだれだ』と」は「にらみつけた」、(159)では「ゆっくり病気を治してこいと」は「殿様からありがたい計らいがあった」、(160)では「『乗車券を拝見させていただきます』と」は「回ってきた」というようにいずれも「～て」節が包み込まれる「～と」節は後続の動詞の随意成分と考えられる。実際、このような三節複文においては前二節が削除され、主節だけが残っていても、文としての自然さを依然として保っている。

4.8 「～て、～ように」

このパターンは所期の目的と比喻との二つに分けられている。前者の「～ように」の「に」は省略される場合もある。次の用例を参照されたい。

(161) 他人の家に行って、笑われないように、ふだんから行儀を良くしておきなさい。

(国・217)

(162) ぎりぎりになって、気せわしい思いをしないように、夏休みの宿題は早めに片付けておきなさい。(国・131)

(163) 主観にかたよって、判断を誤らないよう、他人の意見もよく聞きなさい。(国・342)

用例(161)では「他人の家に行って」、(162)では「ぎりぎりになって」、(163)では「主観にかたよって」の「て」は<継起的または並列的な動き>を表すものと考えられる。このパターンの「～て」節が後続の「～ように」節に包み込まれるのは用例でうかがえる。

一方、次の用例で明らかのように、「～て」節は「～ように」節が包み込まれる後続の主節と<副次的な動き>あるいは<継起的または並列的な動き>との関係で繋がれている。

(164) 王の顔は蒼白で、みけんのしわは刻み込まれたように、深かった。(国・99)

(165) 毎日毎日子供の世話に追われて、お母さんは目が回るように、忙しい。(国・806)

(166) ついに感きわまって、こらえていた涙がせきを切ったように、あふれ出した。(国・175)

所期の目的を表す「～て、～ように」と違って、比喩を表すこれらの三節複文「～て、～ように」の「に」は省略不可能と言えよう。

4.9 「～て、～なんて」(注7) 「～て、～うち(に)」

「～て」で始まる三節複文の内、「～て、～なんて」はとにかく無視されがちだが、採

注7: 「なんて」は「など」の派生したものとみなされるのが一般的だ。そうだとすれば、「など」と同様、副詞節を形成する機能は「なんて」が持っている。詳しくは趙(1995d.)を参照されたい。

「～て」で始まる三節複文の考察

集した用例で明らかのように、これも多用されるパターンの一つである。

- (167) 結婚式直前になって、破談だなんて、まったくいい恥をさらしましたよ。(国・639)
- (168) いつもは自分勝手なことばかりしていて、困った時だけ哀れみを請うなんて、そんなの虫がよすぎるよ。(国・39)
- (169) うかうかと人の言葉を信用して、ついていくななんて、不用心すぎるよ。(国・74)
- (170) 中学生にもなって、あんないたずらをするなんて、どうかしているよ。(国・386)
- (171) 大人に向かって、あんな口のきき方をするなんて、態度が悪いなあ。(国・436)
- (172) 強情なおまえが我を折って、意見をひっこめるなんて、珍しいなあ。(国・128)
- (173) ぼくに隠れて、自分だけおいしいものを食べるなんて、ずるいや。(国・46)

用例(167)～(173)ではいずれも「～て」節が包み込まれる「～なんて」節に、話者のモダリティーを含む主節を後続させたものである。例えば、(167)～(170)では「よ」、(171)と(172)では「なあ」、(173)では「や」というようにいずれもモダリティーを含む終助詞で終わるものであることに注意されたい。もっとも「～なんて」節内のテンスは中立テンス(注8)と認められよう。つまり、「～なんて」節には過去形が用いられるべきところを、基本形が使われるのである。

- (174) 気がついていて、黙っているなんて、あいつはほんとうにひどい男だ。(国・678)

- (175) 人に何かをしてもらって、一言もお礼を言わないなんて、そんな非常識な話が

注8：中立テンスについて詳しくは趙(1993b.)を見られたい。

あるか。(国・672)

(176) 彼を向こうに回してけんかして、一步も譲らないなんて、きみも相当なものだね。(国・417)

(177) 左右別々の靴下をはいていて、一日中気がつかなかったなんて、あきれた人だね。(国・8)

(178) あれたけ迷惑をかけといて、そのうえ金を貸してくれなんて、ずうずうしいにも程があるよ。(国・369)

(179) 人を丸めこんで、宿題をやらせようなんて、その手は食わないよ。(国・765)

(180) 他人を利用して、得をしようなんて、醜いことはよせ。(国・557)

(181) 自分は遊んでばかりいて、人に手伝ってもらおうなんて、考えは捨てなさい。(国・381)

用例(174)では「黙っている」、(175)では「言わない」、(176)では「譲らない」、(177)では「つかなかった」、(178)では「貸してくれ」、(179)では「やらせよう」、(180)では「しよう」、(181)では「手伝ってもらおう」というように「～て₂」節が包み込まれる「～なんて」節には多種多様な動詞活用形が用いられることに注目されたい。

一方、「～て」節に、時間を表す「～うち(に)」節を後続させた三節複文「～て、～うち(に)」も多用される。(注9)次の用例を参照されたい。

(182) 森の中で草の上にねそべて、鳥のうたを聞いているうち、うとうと眠り込んでしまいました。(国・154)

(183) あおむけになって、天井を見ているうち、いろいろな空想が浮かんできた。(国・544)

注9：予想と違って、三節複文「～て、～とき(に)」の2例は「～て、～うち(に)」の10例と比べれば、一段と低いことは今度の調査で分かる。

「～て」で始まる三節複文の考察

- (184) 赤ちゃんに添い寝して、うちわで風を送っているうちに、母親も眠ってしまった。(国・154)
- (185) 景色に見とれて、キョロキョロしているうちに、一行にはぐれてしまった。(国・637)
- (186) 今日はあまりにも忙しすぎて、何がなんだか分からないうちに、一日終わってしまった。(国・600)

用例(182)～(186)ではいずれも(～ん)節が包み込まれる「～うち(に)」節に主節を後続させたものである。原因理由の「て₁」を表す最後の用例(186)を除いて、(181)～(185)の「て₂」はいずれも<継起的または並列的な動き>を意味するといっておかろう。

4.10 その他

「～て」で始まる三節複文の主なパターンは上述した通りである。次のパターンに出る用例はわずか1例または2例しかないが、参考のために付記しておく。

- (187) 高度成長に伴って、日本人の生活水準が驚くほど高まった一方、さまざまなひずみも生じた。(国・443)
- (188) ちょっと家に電話をしてくると言って、出て行ったきり、彼女はなかなか帰ってこない。(国・546)
- (189) 祖母の病状はだんだん悪化して、もう食べものがのどを通らないくらい、衰弱していた。(国・367)
- (190) 使う人の身になって、使いやすくじょうぶに作ってこそ、本当の仕事ってものだ。(国・768)
- (191) 背後に殺気を感じて、身をかわした瞬間、くせ者のやりさきがきらりと光った。(国768)

- (192) 二度も脱線事故が重なって、起こったために、社長は責任をとって辞任した。
(国・151)
- (193) 急な峠を登りきって、ほっとしたとき、雷が鳴りだした。(国・548)
- (194) 論文を書き上げて、筆を置いたときには、もう東の空が明るくなり始めていた。
(国・708)
- (195) お金をなくして、途方に暮れていたところに、親切な人が通りかかりました。
(国・570)
- (196) 勘定を済ませて、レストランを出たとたん、かさを忘れたに気づいた。(国・180)
- (197) 子供の病気に加えて、奥さんもけがをするなど、彼には不運が重なった。(国・696)
- (198) 階段から足をふみはずして、向こうずねをいやというほど、打ってしまった。
(国・795)
- (199) お酒を飲みすぎて、自分がどこにいるのかわからないほどに、正体を失う人がいる。(国・350)
- (200) 思ったより傷は深くて、ちゃんとふさがるまで、三週間もかかりました。(国・702)
- (201) 「しばらく席を立ちますのでよろしくね」と言って、食堂車に行ったまま、隣
の人はまだ戻らない。(国・400)
- (202) 弟とA君とは二人ともオートバイが好きで、うまが合うらしく、最近いつも一
緒に出かけていく。(国・88)

用例(187)では「～て、一方」、(188)では「～て、～きり」、(189)では「～て、～くらい」、(190)では「～て、～てこそ」、(191)では「～て、～瞬間」、(192)では「～て、～ために」、(193)では「～て、～とき」、(194)では「～て、～ときには」、(195)では「～て、～ところに」、(196)では「～て、～とたん」、(197)では「～て、

「～て」で始まる三節複文の考察

～など」、(198)では「～て、～ほど、(199)では「～て、～ほどに」、(200)では「～て、～まで」、(201)では「～て、～まま」、(202)では「～て、～らしく」というようにいずれも「～て」で始まる副詞節に多種多様な副詞節さらに主節を後続させた三節複文であることに注目してもらいたい。なお、「一方・瞬間・とき(に)・とたん」などは節と節を結ぶ文法機能を持っているので、結合価文法から見れば、一種の接続副詞として「PM」の「M」に相当するのと考えられる。用例(197)の三節複文「～て、～など」は用法上「～て、～なんて」にかなり似ているものの、書き言葉的表現であるし、用例数が1例と極端に少ない。用例(120)の三節複文「～て、～ため」は同じパターンに属する原因理由を表す「～て、～から」などと比較すれば、用例数もわずか1例しかないので、わざとこのグループに入れることにした。注意すべきは目的を表す三節複文「～て、～ため」のパターンは今度の調査では1例も見当たらないことである。最後の用例(202)の三節複文「～て、～らしく」の「～らしく」節の認定の是非については賛否両論に分かれているけれども、二節複文「～らしく」節の用例が夥しい数にのぼることから、助動詞「らしい」から派生したものと認めながらも、接続副詞の文法機能を持っているので、一つのパターンと考えられよう。

5. 結 語

小稿では仁田(1993)と南(1993)を踏まえながら、結合価文法の文構造を参考にして、用例が一番多く、用法が一番広い「～て」で始まる三節複文を三万にわたる実際の用例から抽出して考察してきた。結論を言えば、第一にこうした三節複文は①「～て、～ ϕ 」②「～て、～て」、③「～て、～から」、④「～て、～ながら」、⑤「～て、～のだから」「～て、～ので」「～て、～のか」「～て、せいか」、⑥「～て、～が」、⑦「～て、～と」「～て、～たら」「～て、～ば」「～て、～なら」「～て、～ても」、⑧「～て、～ように」、⑨「～て、～なんて」「～て、～うちに」、⑩その他と、主な10のパターンに分けられる。第二に「～て、～けれども」「～て、～なら」「～て、～ため」などの三節複文は用例が極端に少なく、わずか1・2例しかない。第三に「～て、～のか」「～て、～なんて」

「～て、～らしく」なども外のパターンと同様、三節複文の機能を果たしている。第四に三節複文「～て、～ながら」などに見られるように南(1993)の「て₄」を除く、＜副次的な動き＞の「て₁」・＜継起的・並列的な動き＞の「て₂」・＜原因理由を表す＞の「て₃」との間にはっきりした境界線が見当たらない、いわゆる「て」の意味と用法の連続性を示す用例はいかに多いかが分かる。

参考文献 (abc 順に)

- ・カトリーヌ・ガルニエ 1994 『日本語の複文構造』細川英雄・小出美河子訳・ひつじ書房
- ・小泉 保 1993 『日本語教師のための言語学入門』大修館
- ・益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法——改訂版』くろしお出版
- ・南 不二男 1993 『現代日本語文法の輪郭』大修館
- ・仁田義雄共編 1993 『日本語要説』ひつじ房
- ・奥津敬一郎・沼田善子・杉木武 1986 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- ・湯 廷池 1993 「外国人のための日本語方法——考え方と教え方」『日語教學研究國際研討會論文集』東吳大學
- ・寺村 秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- ・趙 順文 1993b. 『日本語の三つテンスの語用論』『台灣日本語文學報 4』中華民國日本語文學會
- ・————— 1995a. 『結合価文法論考』立昌出版社
- ・————— 1995d. 「形式副詞としての『など』の用法」『國立政治大學學報 70』政治大學
- ・曹 逢甫 1993 『應用語言學的探索』文鶴出版社

用例出典

- ・林史典編 1986 『国語基本用例辞典』教育社、略語『国』